成形圖説

農事部 十三

内閣文庫
和書類
二九四三八號
三〇冊
一九六函 一八架

内閣文庫
番號 和 29438
冊數 30 (13)
函號 196 96

国立公文書館
National Archives of Japan

成形圖説巻之十三

目録

農器 附犂具

耒耜
鍬耖
耙鋒
杴钁
鎒耰
朳櫌
鎛鏟
附 鐙鋤

內 一一一二〇號
堀氏文庫
79

釟欋（カナカキ　サラヒ）　附 鍏鉤（クマデ）
耘杷（クサカキ）　附 穀杷（モミサラエ）
長鑱（フクシ）　附 鵶觜鋤（ツルノハシ）
鎌鍥（カマ　ナタ）
鉄鉞（マサカリ）
橋槔（カジキ）
拖杷（イナコギ）
連枷（カラサホ）
臼碓（ウス　カラウス）　附 陶臼（スエウス）
礱磨（ヨルス　アラウス）
箕簏（ミ　フルヒ）　附 篩穀篣（ツル　トホシ）
颺扇（モミクルマ）
颺籃（モミフルヒ）　附 千斛簁（トホシ）

成形圖説巻之十三

農事部 農器類

田乃器（タノウツハ）書紀○和名鈔に農具といへり

農器 孔子家語鉏剣戟為農器凡田器耕器農具耕具等の名ありて實おなし○宋仁宗實録云呂夷簡通判濠通州往河北按行水災還奏田器有算非所以重本請除之因詔天下農器皆免算

田器 禮記月令

蕃名

元正天皇詔曰朕巡京城遥望郊野芳春仲月草木滋榮東候始啟丁壯就隴畝之勉時雨漸澍有蟄蠢浴灌之悦何不流寛仁以安黎元布涼化而濟萬物乎宜給戸頭百姓種子各二斛布一常鍫一口令農蠶之家永無失業官學之徒專

内 一一一二〇號

忘レ私ヲ又養老五年詔シテ諸國官長等に鍬各二十口を賜ひ農
耕を勸メ勵サしめ玉ふたゞちに農戸ハこれら田器牛馬を
おこたれバ耕穫ことに徒の力をつひやし耨ナカウチ耘クサギリの功ワザをい
ちじるしからぬものなれバや抑又百姓の田器を貯ふ
るものハ宜しく武夫の兵具を蔵るがごとくなるべきが
しいまハどの好農具を持てりとも其の技よりあつかひ
く耕し耘除の倣工ハタラキこまやかならざりけれバ劍鎗刺撃
の術をしらざるものゝふの鎧甲の巧拙を鑒賞して其銑
鈍を試みるに異コトならず天正の末豐太閤既に海内を
饒治して百姓の刀鎗等を停止せられしハ一揆を戒む
るの心得まで其條書の中に百姓ハ農具さへもちて耕作
を専にいたしぬれバ子孫おのづから長久なるべきよし
と唐堯の寶劔を農器に用ゐられしごとく専に農業を
心掛あらしめんとなり蓋唐裴度ガ鑄テ劍戟ヲ為ス農器ト賦あり
凡ツ五方乃農圃一州の内にして其所用ハ各いちじるしく其
名状ハ互に同しからざるものおほくあれバ又編アミを
圖寫するに及びがたし絶域にいたつては耬車砒車の罍碌ロク
礴ドウ礰レキ礋タクの制何れも極く其巧便なるを稱道すといへども
今此方の着裁して試に之を使ハしめば終ヒ日メモスに碌ロク〻しくとして
沖オキ縄ナの人に雙刀を佩サせたらんがごとく縛わて胃喘アヘ

く耳堪さしむ然ども心を実に用うる者あらバ農家の
小補ともなりんげ況や民事ハ常に違なき哉若し
力を役るには苦しまず凡耕地の法ハ犂を通ほしと
ふたび耖を用るもの二たび耗を糞ふまでもなくてふたび
しかして始て稲田平に泥壌熟なるの全功を得るにいたる
然るに農の事常に艱苛に支られて耕耘数偏うしもて
且新秧を抜挿し且ハ其穫収搗治など常に時に後れ
候に應ざるがゆゑ動もすれバ火水雨暘の和氣を失ふの
憂あり是なれバ養老の帝寛仁を流て萬物を滋ふことの先
衣糧を先にして饑寒の苦を救ひ因て蠶を併せ給ふに

むべなる哉嗚呼我　先王黎元を安ずるの道なほかくの如
かくして圄空の隆なるの徳まつりごとにもかへさせたま
ふるべし因し　朝廷の詔曰今者有司奏言諸國罪人惣
四十一人准法並當流以上者毎聞此奏朕甚愍之宜所奏
罪人並從坐者咸皆放免勿案検焉　日本國中の罪囚僅
に四十人餘をとて天子の叡慮哉悩ませたまふことあると
見て萬方有辜在予一人此ありさまを想像しまゐらするに
かたじけなし南史云宋高宗微時躬耕及受命耨耜之具頗
存命藏之以留于後文帝幸舊宮見而色慙近侍進曰大舜
躬耕歴山伯禹親事水土陛下不観遺物何以知稼穡之艱

難先帝之至德乎志るゝよ今わたし國ハ人くさあしく
土地もよろしからざるがゆゑにあまさのせうへ言よ
足あまさの器械とく耕しぬる手段あらあるとも文よ
記しぬるよしなの上乃器ふどくと尚海やうよことろし
くに就てたゞ便道かくうせげしといひ単だらりよ
惣はしりづゝひあんたゞ作りの上よ何の益をまさらず
少しあまどバ田器の簡當を擇て耕作の業は精しく勤ん
と思はさむものはよろしく僅篤く役節して沒稼穡の
成績をや其得る急しと云

須伎　書紀耜の字を訓せし也　鉏鏤鍬なども書る也

志貴　金耜　以上古事記○古の耜或ハ木を用うるよし云

辛鉏と倣ひ　於古志　土を起すより名くれ即犂也

柄耜　新撰字鏡犂を訓セリ○内膳式

牛鍬　東鑑地名にいへり今山陽道にて

犂を件の鍬となす馬鍬に對へいふる名にて其形耒耨の前後長短の定あるのミなり

耒耜　易繫辭斲木為耜揉木為耒耒耜古用木金耜ハ以金為之○說文耒耕曲木也从木推手耜ハ耒也○孟子注耜所以起土耒其柄也増韻耒耜常又曰耜○

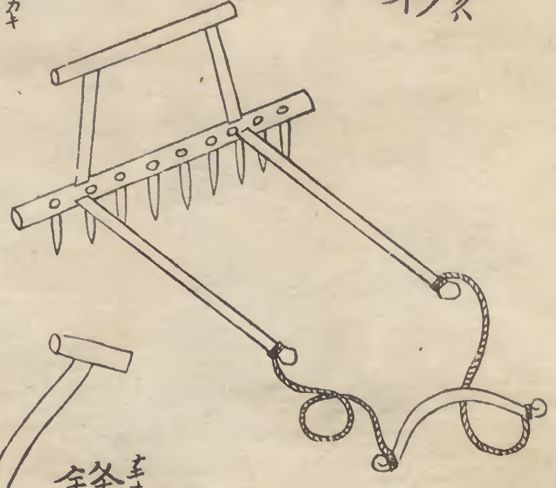
犂　食貨志輓犂易大全謝疊山云農政全書耒耜二物而一事猶杵臼也耒耜者今謂之犂曲木在上俗名犂衡即耒也劉削二片在下以承鑱二斤俗呼犂鑱即耜也

鈴鐕　說文大犂也

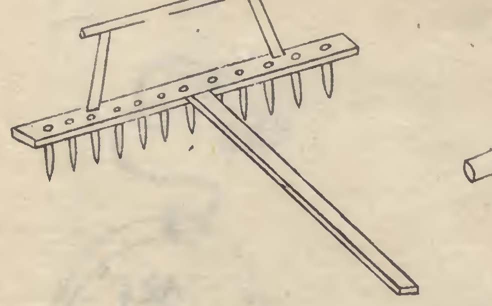
蕃名プルウグ

古語拾遺曰齋部官掘以齋鉏而造伊勢宮及大嘗由紀主

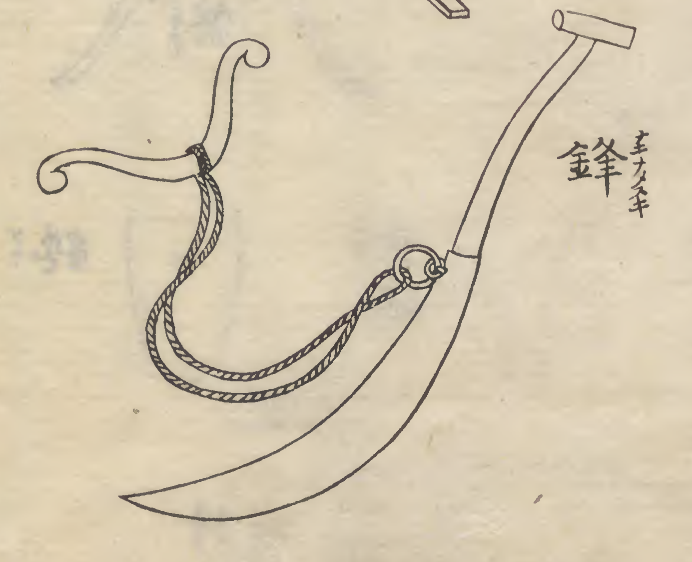
耖



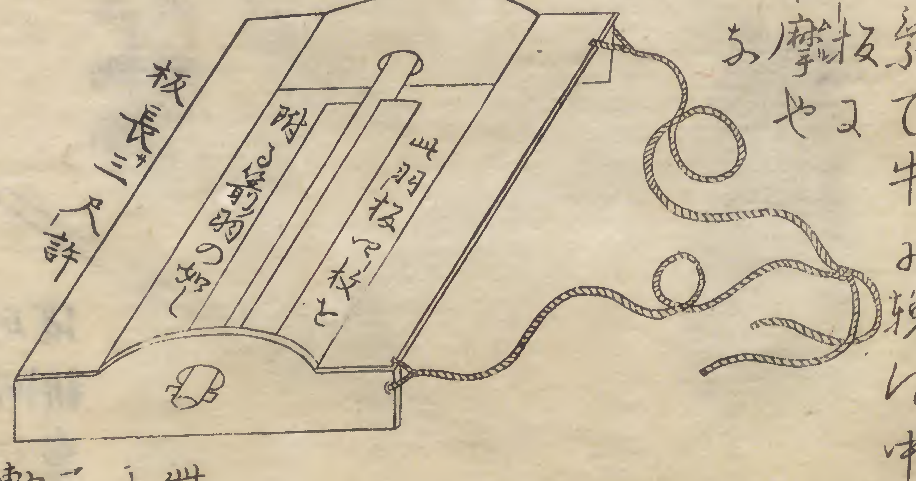
耙



鋒



碌碡　此物前後の両板に人跨りて横に系て牛に挽れ中の軸轉るに隨ひ羽板にて田土を平摩す故に此に田ならしといへり



此軸輓につきて轉る軸ノ大サ囲リ四寸許

基宮蓋上世の時鍬てふもの田を耕し土を起すものゆゑにつむ
かりにあらず凡ハ去穢掃地の器なればその名須伎と
いひしなり大嘗會の時由紀主基の田といふあり由紀
ハ斎忌なり主基ハ濯にて並に清浄の辭なれ又古事記
雄畧の大御歌にも然ありとよまれし故号其岡謂
金鉏岡也ともみえたるハ土を掘り上るの事よりいふ
なり書紀にハ御田鍬てふ人名あり又送飯をいひなどて
くさ新字鏡には糙をいひすくといふ凡物を取上るに須
久といふ語あるゆゑに捋をもすけるといひ或ハ魚をとる網
を結紙を抄などいふ皆物を掬ひして取上ぐるにいへり挽菜

子に掘りあげ薮もしきなどうゑてみゆるに長柄と
いふもの鋤などいはさげてつかひていぬるこ
そわびしきわざかりけれ蓋太古の耜ハ或金或ハ木な
れバ木の柄を施して柄耜の名ハいできたりとぞ
えらるゝ鍬の如きハ後にハ犂になるかしにやされど
神代の時より牛もて田を耕すことのありしにハあらず
美濃の耜てふものゝおほくまで或ハ耜の柄を曲て牽
せしなれば西土にてもむかしハ木を曲げ尖らして耒耜
つくるとも又後漢書にはカ眞の俗牛耕を知らざるよし
を見えたれど西土にても牛にかゝらしハ後のわざなり

金布久志　端 以上和名鈔　柄耜乃端　耜端 此ハ耜の中より出しある所あり

長八寸八分許
闊五寸八分許

鑱 陸龜蒙耒耜經 冶金而為之者曰鑱起其墢者也　銕犂鑱 尖本艸

蕃名 子ツプエイスル

箆 新撰字鏡　柄耜乃縁 訓蒙圖彙○箆長一尺許闊七寸八分許端箆二ッハ皆銕にて造る○内膳式曰辛鉏閇良二枚鋒四枚隨損請

鐴 和名鈔引唐韻犂耳也亦作壁○農政全書覆其墢者壁也其形不一耕水田曰瓦繳曰高脚耕陸田曰鏡面曰碗口隨地所宜制也

蕃名

居去　牀 以上和名鈔

耒底 和名鈔　犂底 農政全書

蕃名

揚附 此のものハ底板の磨きをささるやうにおよ銕と鍛とのなり

壓鐴 農政全書

蕃名 コウトルエイスル

居去乃柄 和名鈔

耒骨 漢語鈔　策額 農政全書

蕃名

絡梶形 和名鈔 箆金をいふ かたくのなり　多々良

耒箭 漢語鈔　犂箭 農政全書

蕃名

取首和名鈔　禰利訓蒙圖彙　長柄

耒轅漢語鈔　犂轅農政全書

蕃名

追立訓蒙圖彙

耒梢漢語鈔　犂梢農政全書

蕃名

引鉤俗音備　尻懸和爾雅

耕槃農政全書駕犂具也與軛相爲本末

○耒耜經横於犂轅之前末曰槃

蕃名

耜乃柄延喜式

犂轡　犂轡以上郷談正韻　犂柄過庭録

蕃名

凡犂にハ延持鐙の二絆あり。延ハ底板より梢を貫く

梢の右方にあり。左右に柄各一つ出し。左手に本の柄を執り右手

に末の柄を執て耕すなり。因て延ハ只耕す土の深浅を起して

深浅を自由にす。○持鐙一名ハ持立。是鐙より梢

を貫て梢の端に横たはり。毎年にさし出して桜鞭なる

但ぞ深く耕むと欲ふにハつよく押へ浅からんとする

にハ弱く押へおさまる浅深にて自由を通し凡田土

を起撥なく浅深の交錯ある事を宜しとす延犂ハたゞ一ッや
うまく絶しとりあつかふ事なし持鎛犂ハ手熟の者にあ
らざれバ擶持使がたし凡犂にて耕をハ十倍人の力に
代ると云是牛一疋ハ人の八九にあたれバなるべし
又耕に太巧拙の差ありとよりも耕やし撥のよく
反覆すと上より土をも凡人はいかに及べ牛馬共に
盡日泥中に入て輓るゝ時ハ甚罷て後ハ脚を引挙がたし
くなれる也○近江美濃等の水田ハ深淖ゆゑ牛耕を用
ひがたく人各一耜を秉て田を耕てハ太なるその外大
鋤といひ小なるを小鋤と称へ又字統に多く馬をして土を

発し田を耕やう馬牛の農事における尤なしとしるべし

久波 古事記

鍫 音幧○漢溝洫志 臿 亦作𨫼鍤○農政全書古謂臿今謂鍬一器二名宜通用蓋今の俗ちまきくはといふ
ふぐごとし 方言燕之東北朝鮮洌水之間謂之𣐏宋魏之間謂之鏵或謂鏵江淮南楚之間謂之臿趙魏之間謂之喿 皆謂鍬也

鋤 音鉏集韻即與鉏同故に鉏鋙亦作鋤鋙字彙鉏ハ立薅所用也是今の立鋤なり○左傳註耨ハ鋤也

鎡基 孟子○史記作茲基 基亦作錤字典鉏也

銕鏵 本艸

蕃名ガラアフ

久波とは喫齒といふがごとし土を首の曲て利く地を斫
るハ喫いれるがごとくなるより名つけしとぞ凡鋤の

端尖るを篦先といひ方なるを八筒先といふ按に
和名鈔に鍫を久波とし字鏡にハ鏵ハ鍫也須伎と訓され
バいにしへハ須伎久波通じていひしことゝの套語
のごとし唐土までも古ハ臿といひ今ハ鍬といふと有
て後ハ人して耕たるものを推なへて鍬とし牛して土坺
をすき鉏といふ也とよみなるよし舊事玄義に曰男弓弭之物ハ忌
鍬忌鋤類是也とも書したれバ古ハ鋤鍬などを調賦
に充しかくてまた畿内神祠に鋤鍬を納めまゐらしたるの
例遺れる尾張風土記海部郡大井田郷出年貢籠鋤鍬
鏟等民用繁又むかし鍬盛とて鍬をいたゞく式あり今に

も鄙の農戸がなれたることなりき大神宮式凡操營神田鉏
鍫柄者毎年二月先祭山口及木本然後採之　大神宮鍬
山の神事の式と雜例集に載たり　元禄の頃にも大神宮神田の神事に用る
鍫形し拵まて造らると営みし事など侍り　按に神名式尾張國諸鍬諸钁等の
神社あり今も其處にハ鉏一を每人して一ハ押へ一ハ
引て耕せし是諸鍬てふものにて古の遺法なるへし
周禮注古者耜一金兩人併發之なとと論語耦而耕などあ
れバ和漢ともにいにしへのわざハ一揆にや又蝦夷に
鍬先てふ物あり極て大きくいにしへ諸耜の屬にて先
王夷人へ農を勸ん為に給ひし所の鍬にやといふ一説に此

鍬先ハ夷人捶て重き宝として病る時に枕神に立て災を禳ふ物なり慈姑の葉乃形なる故に冑の鍬形をかたどることのみにていにしへハ霊宝となせしとみゆ又関東にて牛耕を用ゐず其民水田を耕にハ鍬に番を結ひ着て是水を搏つ時泥の激て眼を潰さゞるに備ふる所なり淮南子ニ謂禹之時天下大水禹執番臿以為民先方言沅湘之間臿謂之番 番臿をおもひ合はすべし

馬鍬 延喜式

馬歯 辨色立成 毛宇賀

鈀 音杷 三才圖會○農政全書 鈀と耙と分て二物とす

蕃名

此もの馬に繋て田を作る具なれバ宇麻久波とはいふなり馬歯は形によりて或ハ云即馬鍬の畧なりとぞ於麻久波麻牟具波など呼ぶがごとし凡三番打起しの時田中に耘を踏入つゝ水を灌けて馬に此を輓て田土の塊を碎破り泥濘を一面に熟均なり馬ハ終日泥濘の中を行也され疲困劣しも脚冷汗四溢るゆゑ此ものを轄せめる時ハよく对して食をとらせ息め要に使ひ労させざるやうに小ましむべし○凡耡又人馬水陸共に通じ用ふ漢まで

は犂の後耙を用ゐ耙の後耖を用ゐ又碌碡を用ひし也

渥

加伎 定家假字遣

渥佐良衣 輓把

耙音垻亦作䎱爬把篇海犂屬○和名鈔引唐韻耙作田具

也○說文平田器○三才圖會列鏨方竅以齒為節畦畛

之間搜剔塊壞○農政全書宋魏之間呼為渠挐又謂渠疎

○陸龜蒙云凡耕而後有耙今日只知犂深為功不知耙細

為全功蓋耙徧數惟多為熟熟則 齊民要術

上有油土四指可没鷄卵為得 鐵齒鎬鏤 人字

以上農政全書宋魏之

耙 方耙 鐵器 間呼為渠挐又謂渠疎

蕃名

此外延喜内膳式等に陸田代耕には把犂といふあと

而あり用て馬耕に代ふ畢し而田のごとき耖把いまだ

編かゝぶて或は為牛入がたき所傍畑の畝町狭き処など一

人輓き一人之を按田土を疏通るなり又陸田にて一人

卻行して把に代り耙盪なとのあり 漢の人字耙は人上に載て牽ものとあり

按に渥かきといふ器なとといへるの其田土を耙盪

次其の用ハ全を同しくして只木柄と索緒との差別のみ

てその名を異にせるのみ

長刀耜亦長刀鍬とも云長刀ハ長き刀の略なりと長剣

の名にまぎれしあに薙刀と書たるもあり

小柄耜

鋒 齊民要術○農政全書鋒古農器也其金比犂鑱小而加鋭其柄如耒首如刃鋒故名鋒取其銛利也地若堅拾鋒而後耕牛乃省力又不乏刃農書云無鏵而耕曰耩既鋒矣固不必耩益鋒與耩相類今耩多用岐頭若易鋒為耩亦可代也近世農家不識此器亦不知名茲特録其功用知為不可廢也

蕃名

此ものは新開の平地を牛馬に服控せて草木芟薙し跡の乱根を截断に用ゆる所なり形ハ眉尖刀に似て其脊の方に鋒刃をつけ柄ハ耒の如くし中ほどに環或ハ肩耕索を貫し牛犂小鑿なとに柄の端へ横殺を施し是にて按へ畜の力をもて挽しむるなり其土塊或鋤破荊棘の菝と切捕し次に其利剣毛と吹の快に比し断しかくして後

犂耖遣便によこさしへめるときは大に人力の労を省き敏小墾闢乃功を遂なり西藩當此ものを用ゆること多く耕子畝の界境とふせしものあるも其用を按に西土の鋒耩なるものと其制に符なり

小鍬 書紀○集解に見ゆ

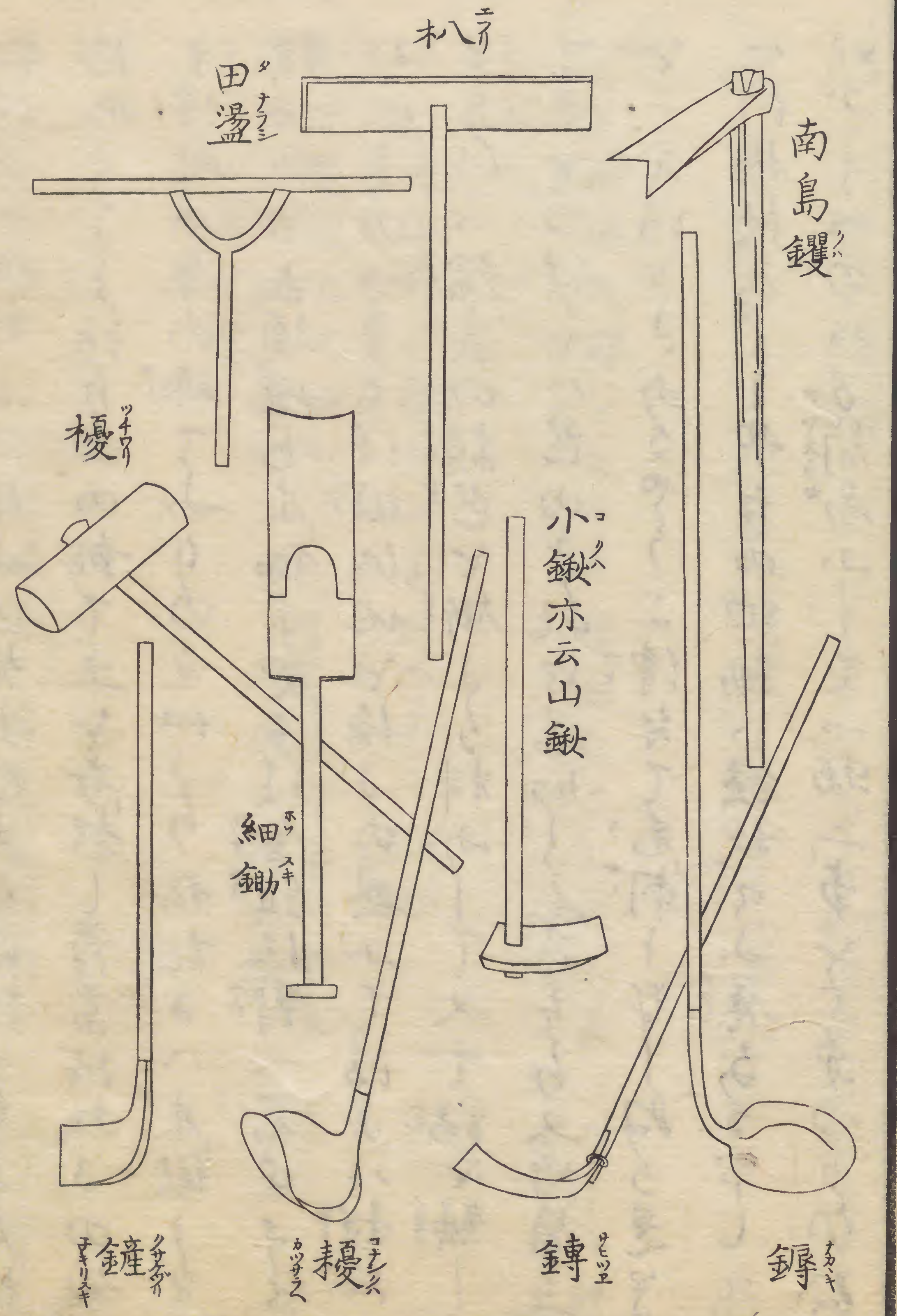
鏄 亦小鍬の名あり

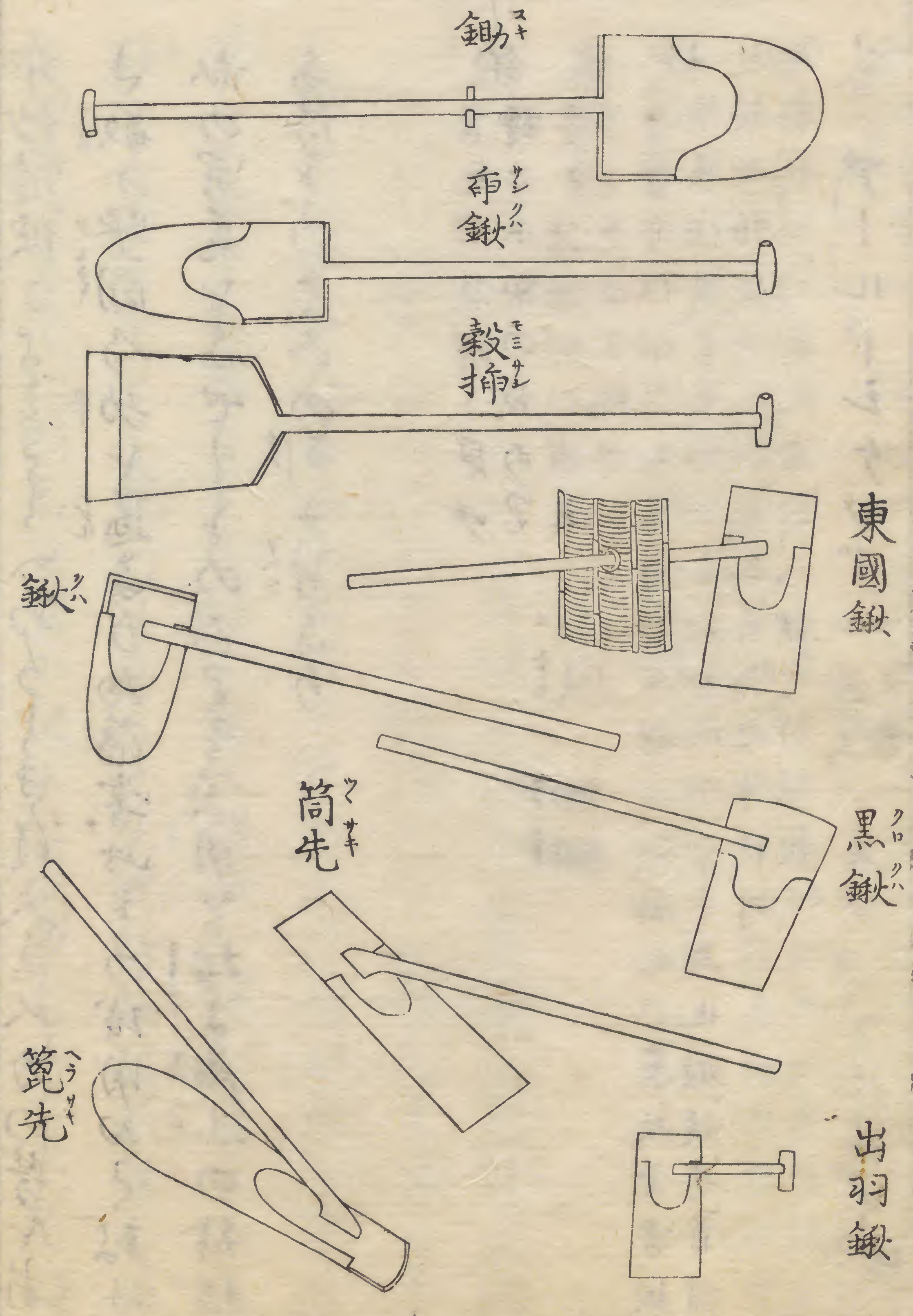
古須岐 漢語鈔○或云

小扱 細鋤

枚 音發亦作檶○和名鈔引唐韻枚鍬屬也○農政全書枚之鍬屬但其首方闊柄無短柺此與鍪臿異也鍛鍬為首謂之鍬枚惟宜土工刳木為首謂之木枚可㯏穀物以竹為之者淮人謂之竹揚枚

蕃名 アールドシケップル 撥土之器 スコップフルチイ 小鍬





国立公文書館
National Archives of Japan

仁徳の大御歌に山背女乃木くは持うちし大根
さわくにと言り女の執て土を打起し蘿蔔を抜るの鍬
なりけれ八今の插(サミ)てふものに似たり私記に八木鍬とも
漢語鈔乃古須岐と木鋤にやこは金(カナ)鉏(スキ)に對(ムカ)へたるなる
ば此ものは多く土を掘(フリ)ひ地を搖るの具にて後に八穀(モミ)插(サシ)
となれば稲麦の穎(ノギ)芒(ゲ)を衝(ツキ)きる料にして又其端(ハシ)を鋸(ノキリ)し
て刃をつけしは芒のきれ口すかしんためなり又竹筒三(ツ)
を一つに合せきあるやうに傳(ユヒ)付て毛刺(ケサシ)となしぬる是等
八竹掃枕なとるにや今の細鋤八鍬枕て乃屬(タグヒ)なるべし凡
いかしへの八簡易(ツヤスラカ)にして一物二事をも兼つかひね

殊に其質も精緻牢固なりきとも大和春日に三播などに
遺りたるむかしの器具なとみてもしるべし

大鍬(クハ) 貞観儀式鑁とよめり漢語鈔亦おなし蓋いにしへは二器一名のものなし或是當時の俗字に據れるもなるらむ

山鍬 本山野を墾(ウチ)闢(ヒラク)に専(モチウ)ものと
のを用ふるなるに此名あり

黒鍬(クロクハ)

鑁音矍說文大鉏也○
鐯音灼爾雅鑁也
阿鐃 正字通阿訓大
譌而為烏鑽
錯斫 魯
斫以上三才圖會引爾雅

蕃名

農政全書鑁主以除物根株也蓋農家開闢地土用以劚荒

凡田間山野之間用之者又有闊狹大小之分總名曰钁按
其圖なる所ハその所謂山鍬なり

中爬 亦中挽 とも云

前把 和爾雅

鎒 音耨 今作耨 農政全書○爾雅所斸謂之定 廣雅定謂之耨○孟子易耨○淮南子治國者若鎒田去害苗者而已○字詁耨頭長六寸柄長六尺以芸田也○左傳註耨鋤也
但說文穮耕禾間といへるこそ中把のわざにハかなへるや

蕃名

凡耕と加幾とゝいふは要ハ深田の代ハうゑてありふ
とあるも耕してばかりしおれしきがおとし此ともの裏ハ

亀の甲のおと中際くうしらへ粟麦などの畦隴哉挽て
御行もれバ壌ハ随左右へ分まておのづと莖根に耔ふ
足故農圃陸田を培壅るの要器とせり

古奈志鍬 土を和熟するをこなしといふより出しなるらん

勝把 加賀鍬

耰 音憂 說文摩田器○論語註耰覆種也○莊子註耰鋤也○淮南子耒耜耰鋤○史記耕之耰之鉏之耨之

蕃名

按農政全書耰鋤の圖にあり云耰為鉏柄也未詳ならざる
小似たり又云北方陸田舉皆用耰鉏江淮間但用直項鋤

頭刄鉏鋤也其用如劚是名钁鉏とありされバ耰鉏ハ
北方のことにて钁鉏と一物なるべし

衣布利 漢語鈔

古與世 杷寄の約なるを

田奈良志 編多識

八音八或作𨥺欋和名鈔引郭璞方言注杷之無
朳齒者為朳○三才圖會所以平土壤聚穀實也
凡水田渥漉精熟然後踏糞入泥盪平田面乃可
撒種此亦田盪之用也是亦碌碡と同功なり

田盪 農書

蕃名コロップル

按ずるに柄簀なるを西洲簀と夫利といふものの物或ハ糞の
具なるく塵を撥入れて篭のごとくなし柄とつけたるも

も此名あり又溼田などの剝を鉏にて立ぐるくよふきなる
所と見まて杷ませ泥を盪し耕すなるべし凡ハ田の
面を盪平するに用ゆ又手長柄にもの八土塊杷裂にもつか
へり

土破 和爾雅

横楑 眠寤集

櫌 音憂字彙 打塊槌

田打槌 編多識

木斫

塭槌 以上三才圖會 以平田疇擊塊壤

田槌 俗語度年知 田槌の訛也

蕃名ビユークハアムル

按るのものハ堅塔と碎きあるハ藥塘城なむるに用

るものなり又稲穂を揺落しくは芒毛をおとさるにあるべし
のものを使へりといふ尋常の鋤に比すれば横に指出し且
の如きはいと迂闊にして鋤を用ゆるに不便にして執
に斧を使ひ棒を用ゆるにいたる蓋人智の日に敏捷に適
見ゆるなどかくのごとく云鋤
却て損壊する事あるべし

鉏杖 漢語鈔○天武紀に小子部連鉏剣てふ人あり鉏とあ 佐比と訓れバ鉏を亦佐比と呼びしならんと云へり

草切鉏 多識編 釿鉏 和漢三才圖會 草取鐮 其形異なりといへども本鋤の遺制なり

又 小鍬 訓蒙圖彙 馬耳鍬 農業全書是麦の根に土かくる具 其歯の馬の耳だちて狭きなるべし

鎛 音博 和名鈔引國語註鉏屬也 釋名迫地去草○詩傳鎛鎒也

蕃名

狭田の草去具なり書紀に韓鉏之剣とあり古事記傳に
佐比は物を截断貌と云る言にて須加比の切る也 又
古へ須伎を延て須加比と云るが此佐比の本 曰
言の須加比と同き故に通はし借たるにや 古事記解所
佩之剣小刀著其頸其鍔者於今謂佐比持神となれば刀
剣のごときものをも鉏といひしならば鉏杖ハ杖の端に
鉏を著たるの名にてもあれば竹籔などを薙きるの具掃ふ
るべし 一説には津ハ助語鉏津柄なり積玉全書鉏柄ト云へ 云一説には鎛ハ今俗に小鉏といふものにて小
柄の謂と を釋けり 空穂物語にさゝらの人ともちつけつる
いでおとく〳〵里にあまてくれのいほりにもきていつ
ゑつきてとほりさいつゑハ小さき杖とも聞ゆれどもなる

けづらとなれバ是を鋳るや按ニ大神宮式ニ金銅鋳(サヒツエ)
二枝 茎長各九寸三分 輪ノ径一寸一分 とあれどこは農器ニハあらぬぞ

草削(クサケヅリ) 多識編

韓鍬(タウクハ) 和訓栞

根切鋤(ネキリ) 江戸

鏟 字彙作剗 三才圖會 両手持之但用前進攛之剗去壠草就覆其根溝田者皆用之鏺非鏺殆與鏟同纂文曰養苗之道鋤不如鎒鎒不如鏟柄長二尺又廣二寸以剗地除草此鏟之體用即與錢同

錢 農政全書 錢其制似鏟

剗鍬 全浙兵製

蕃名

鐙鍬(アブミクハ) 形ニ象るなり

鐙鋤 三才圖會 剗草具也柄長四尺
○按漢の鐙ハ壺のごとし

金鉤(カナカキ)

櫛代(クシロ) 以上漢

鋤簾(ジヨレン) 語鈔 渫溝の淤泥を浚へ攫ひ取るものなり

麻年乃布 越中鍬 石田などの鉏の畫ニ砂さしつる地ニ用う

鈀 音柏 和名鈔引切韻鈎鈀也 鍥搭 鍥把 以上三才圖會 ○農政全書 南方農家或乏牛犂挙鈀以代耕墾取其疏利仍就鎒鎒塊壊又折木為器ともいへり

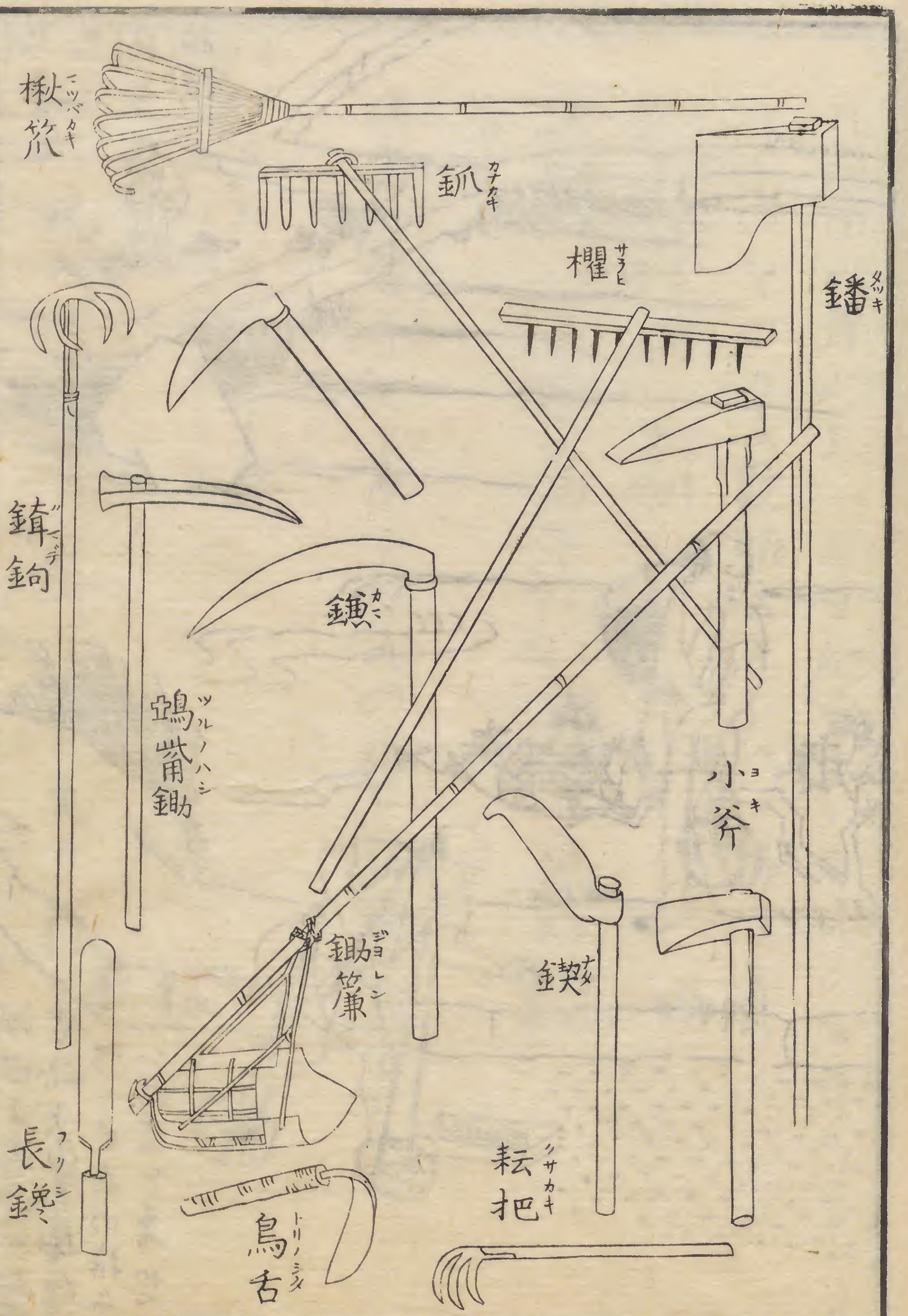
蕃名ハアク 鈀 モッドルシケップ 鋤簾

金鉤(カナカキ)ハ其まて造れる爪のごとくなれバかなかきといい

ふ櫛代ハ其篇の梳ニ似たるゆゑ名付しなるべし 又鍬(クハ)

代せそもいつり万葉佳調くしろつくたぶしのさまに
いふもかゝる大宮人の玉藻かるらん按に宋の張擇端が
画く汴京清明上河圖に農夫の田を耕の處にこの金鉤
をもてり蓋汴州の土堅緊なるはこのものを用しなるらん

佐良比し　新撰字鏡〇俗言佐良衣凡物を復し清く
爬擺がごとき皆さらへつるの清多し
木間佐良衣　俗駒抓ふと書きなり　木乃葉爬　松葉爬
欋　音劬　和名鈔引方言云齊魯謂四歯杷為欋〇品字箋範八五歯杷以之取草　楸箆　玉堂雜字破竹為歯
以取松楸　竹杷　三才圖會　五齒爬　圖書編
蕃名ホーイガフフル　亦ホルン



凡陸田の草刈引一爪に爬搔或は肥壅の合壊かき寄るに
用ゆるものとつゞりて顯昭云さらひハ掃除なり
熊手 亦言熊手鉤 土爬
鎝鉤 韻集 長鉤 鉤竿 竿或作千 以上通鑑 撓鉤 海防纂要
蕃名
溝渠の藹芥とゝめてよどみの流を疏通ぐの具なり
草把 草取ともいふ形大小一ならず
草取 以上和訓栞
耘耙 農政全書 以木為柄以鐵為齒用耘稲禾又云耘盪形如木履而實長尺餘闊二三寸底列短釘二十餘枚以箕

其上ニ以貫竹柄ヲ耘田ヲ之際農人執之推盪禾壟間草泥ヲ使之溷溺則既勝杷鋤又代手足水田有手耘足耘

穀佐良衣 多識編

古通波 和漢三才圖會 蓋穀杷の音轉なり

穀杷 農政全書 用撒曬穀ヲ

透齒杷 同上

蕃名ハアリ

布久志 萬葉集○和名鈔加奈布久志

金篦（カナヘラ）

鳥乃舌（トリノシタ） 布久志を曲るなり形は烏の舌にたとへしならん

長鑱 杜甫寓同谷縣歌○集韻鑱土具 蓋犂具と名同しく物異なり

艸取鎌 和爾雅

埈刀 士民切用ニ削去田畔ノ穢艸ヲ

蕃名

萬葉代匠記曰布久志ハ金にて造るのやうにあしらへて菜摘女の持ものなり是にて菜のさしきるとてなるなり 里常にハ布久世といへり 略解ニ布久志ハ保留の約布にてさる串といふなるべし

鶴乃嘴 同本録

鵐觜鋤 彙硯譜

蕃名ビールハアムル

是石匠（イシキリ）の具なれども田器にもそのものと関べきなり

加麻 古事記○和名鈔引方言刈鉤 柯ハ鎌ノ柄 和名加末豆加 即鎌ノ柄

刈小鎌 萬葉集

草刈鎌 夏の野乃草刈鎌のかねよりあるを世にまさりぬ鈔ハのぞけりけり佐良須鎌とも又鉈鎌あり刈鎌に較れば刃短く厚く草木を刈或ハ葉菜を斫て以て鉈斧に代たとあるをもいひていへ

鎌音廉亦作鐮事物紀原鎌ハ三代之田器也○鏺集韻鎌也
○正字通刈禾鎌曰刈鉤亦曰鉊曰鍥詩銍艾朱傳穫禾
短鎌也小爾雅截穎謂之銍　刎鎌農政全書　所稲鍥珠璣藪
○三才圖會刈刀穫麻刀也

蕃名シノケル

加麻らハ刈なり鉤なりと注せり駿河風土記引香具山
日記曰天叢雲剣或稱草薙剣草薙亦別名也草者生無主
之地此葦原自天孫降臨而後無草叢之神自専輝然爲猶
如繁叢逢利鎌拂其草葉故天孫降臨之後有草薙之号又
齋部記曰取焼鎌乃敏鎌之義といふもいふしくハ物をよ
き清め除を遂の草蕪を刈切の敏功なるによて藤原
大織冠の諱を鎌足としハ悪路を遁て入鹿を誅して
斬給へ除けと利遂の乱擾を撥除ぐことき功ぞを称揚
て名ありしとかいふ　新猿楽歌に儀の鳥乃さいたけ遂
とそかきバおもふ人やさすまちとあり○瓊矛拾遺に昔
者加冠理髪擇有徳人以鎌剪髪之末今按理髪とハ理髻
の謂なり三長記曰承元二年十二月廿五日東宮御元服
被理攺御髻云々　東宮ハ順徳の御事也　又類聚雑要抄曰理髪具案爲
別雑髪故訓理如字末額髪二流簪釵子彫櫛二枚本結日蔭鬘と云
云　按に本結ハ神祇式に髻髪と書けり從つべし　須着源
弘賢に答ふる髻結の條をむつけは斷ぞ後歴金文七
あれどいふものもかまへを使ふとなりて為目阿と出たりば孫犯を決
して必本結の口と切ますしより武士ことを是とする者のきはま
ていつとなく本結の縦緒を切まいふるなりけるかと
因て文七が前付に用ゐあし紙本結を文七本結と云ふなりとぞ

奈多 書紀釿の字を訓す釿字晋書東
夷傳に見へたり玉篇に大鏄也

奈伎鎌 儀式帳

鍥 音楔或作鐯鎝○農政全書鍥似刀而上彎如鐮而下直
其背指厚長尺許柄盈二握以刈草木或斫柴篠或代鐮
斧一物兼用農家便之

彎刀 同上

蕃名ハアクメス 亦セイス

奈多ハ薙断せしを語せり今図する所の者柴薪を斫足竹
木を割裂し其上端に寸許の距鈎あり物を引寄に便ゆ
されども刃厚く柄太く草蒿をハ芟るにハ是唐山の
者とおのづから殊なり

麻佐加利 書紀

多頭伎 和名鈔即廣刃斧といへり○古事記山多豆註山多豆是今造木者也八雲御鈔に八杣人也

小斧 延喜式

薪割

鈇鉞 禮王制

鐇 集韻廣刃斧

小斧子 忘懐録

蕃名

書紀に鋏の質として薪析しおとあるハ今の小斧なるべ
し其刃の横なるによりて横切とハいふなり新撰字鏡に
横刃斧てふもの是なり鈇鉞ハ大斧なり和名鈔工具に斧
ハ乎能とあり又斧斤ハ今なるに匠斧といへり手斧の
省なるにや書紀に鈇鉞賜ふなど書れしハ漢籍によら

れゐるまて実ハ節刀てふものと抄金葉集に伊勢の海
をのゝふる江に朽もて都のうへりつれとぞ見ゆ
晋の王質か故事にて伊勢の小野によせてよめり

加慈伎 仲正歌集○蓋䕬を踏おむに用ゐるによりてかんじきといふとぞ

加武慈伎 太平記○今俗皮にて作れるを賀武義といふハ加慈伎の訛也といへり

泥田履

曽利 堀川百首初冷雪ふりにきらしなゝちらしてしの旅人ゆきに宗まで会津風土記にハ雪車或ハ雪舟と作る又類葉為広の数ミ居をミうゆのそや我乃一もしにもやんのゆあちるらん曽利に載て宗とうもてわくくとよめり北国にてハ曽利に乗て雪の上をそくりゆくとぞ

雪沓

橇 史記○轎字彙與橇同○農政全書橇ハ形如木箕摘行泥土農人欲就泥裂漫撒麦種上奈泥深恐没故制木板為履

楇 漢書或作橇足八此上山蹉跌ざらしむ

秧馬 農政全書 前頭及両邊昆起如箕綴毛縄前後繋足底杈既闊則挙歩不陥るの器ふ足

凌牀 沈存中筆談信安滄景之間冬月作小坐床氷上曳之謂凌牀以揄棘為腹欲其滑以楸梧為背欲其軽腹如小舟昂其首尾背如覆瓦以便両髀雀躍于泥中繋束藁其首以縛秧日行千畦

薅馬 三才図会農人薅草之際寘于跨間餘裳斂之於内而上控于腰畔乗之両股既寛行壠上不礙苗行

蕃名 沓 モッドル.モイル 橇 ラアルス 雪沓 シカアツ 氷上

呂のごとく殺より緒を肩て左足のものハ右肩へ懸右足のは左肩にかけて歩を進つ泥の上をゆき或ハ堀を揆げき泥をけ溷し或実播の稲種をとりおりも所々不同

なり雪車は古比須伎古須伎などいふもの皆知れしか
らん太平記にかじきと謂ざるゆゑ雪中に四五人もち
入たりとあんなり

稲扱(イナコギ) 俗に扱亦扱に作る 按に和泉志等には三才圖會の拖把
の字を假て稲扱に充たれども圖譜を按に此器と
異なり

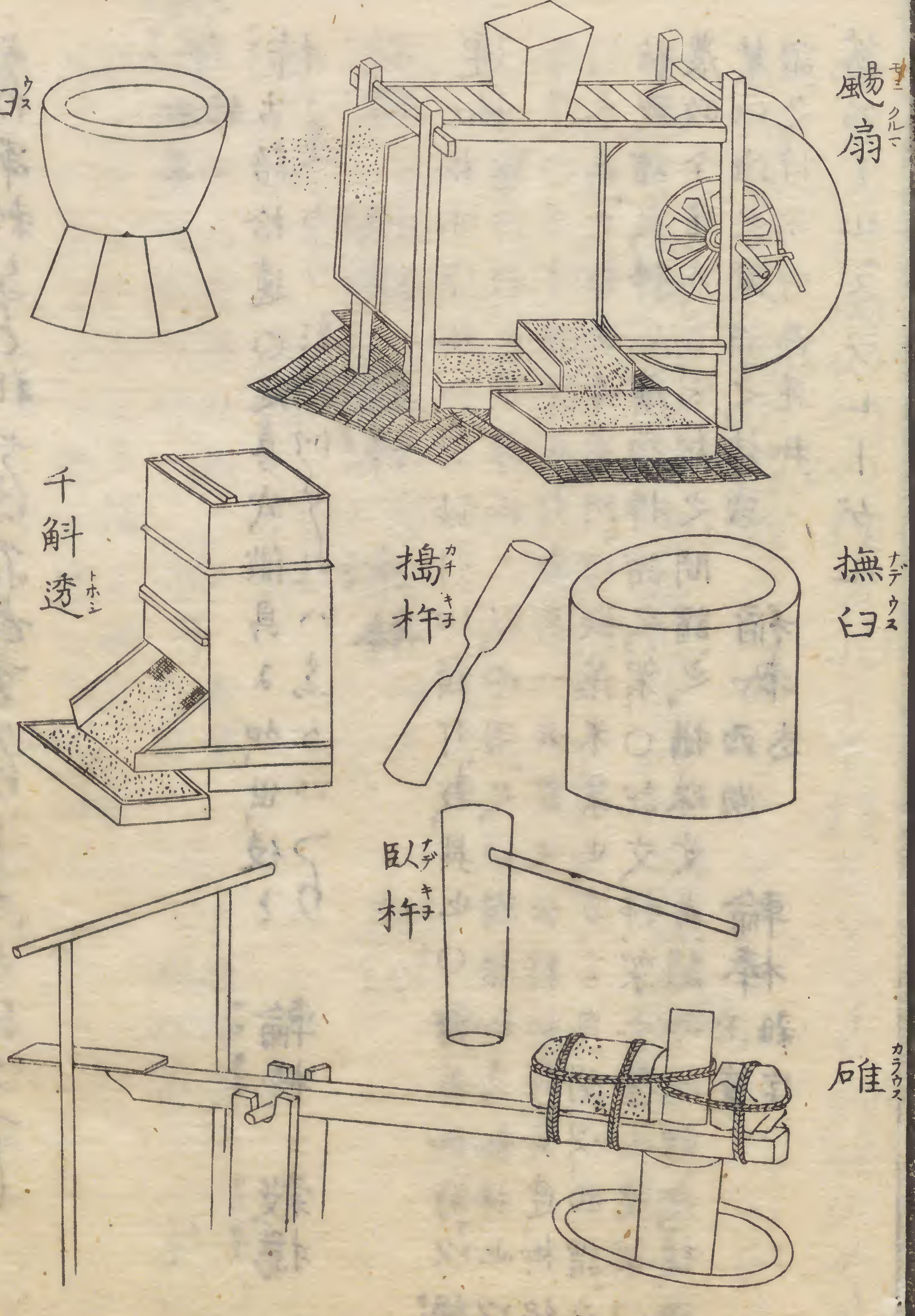
寡婦倒(ヤモメタフシ) 俗言後家倒又後家泣といふ凡昔稲穂を扱には二
つの管にて挟て穀を落せしを此物製出してより
日に数千斛の穀を落て至便捷を得けるより寡婦孀姿(ヤモメゴケズミ)
人に傭はれて稲扱なるものゝ生業と為し遺秉の利なきが
ゆゑに此名あり
稲管(イナクダ) 是太むかし稲穂を落せし器なりと
目ありしにいと稀むかしに弊(ツヒエ)なれバ今に
も扱子と擇て蔵(オトス)に八此ことのに
て一穂二穂つゞまゞきあんなり
金管(カナクダ) 是ハ古昔の竹管に代て用しなるに

いふ
千把扱(コキ) 是一日にして棟稲を扱こと
の功千把にも及べきを称せしとなり 金扱(コキ) 金小(カナコ)
箸(ハシ) 稲櫛(イナクシ) 柄箸(カラハシ) 是八いにしへ篠竹を八三寸許に切て
箸のごとくし掌の中にはさめて
稲をこぎしときの物なり
稲左良衣 稈把(ワラサラヘ)
拖把 農政全書耰麥長把也首列二十餘齒短木柄以批契
継腰曳之○耰麦長把と注せし八西土陸種がちなる
て麦ども稲のおとしておこなふや閩中にてハたまたま桶
の上に拖把とも名て稲扱もといふて稲扱の極て落や
なきがゆゑなり圖て彼方の圖に稲とも麦
のやうに稲耞してあらんさまに書けり
蕃名ヘーケル
和泉志曰拖把俗呼倒寡(ゴケタフシ)元禄中高石大工邑人始造其製
横木為臺長可三尺四脚斜支短前脚高與臺長應仰列扁
釘二十齒齒五六寸長投束稲挿入齒縫扯去藁一日可

斂三十束一大省○いなこきは稲椰柄箸などいふもの
にて稲扱たりしをその後ハ稲穣麥稍とかいへる
一川はのこぎりつゝひらるこはその稲扱なるものと絶
えてやしよりむかし此ハ癈れたりき按に氣吹抄に
串刺といふものは上古より稲穂を取たれば鶴巣とて著
に來たるを穂を扱するに人の田地を犯し害稲と盗ふ
んどせんにはさやうのわざなそては埒あらざれば志久
志左志でふものを用ひたり賊盗律ニ曰其盗之籤稲者損
天功之罪也造之者同罪云々籤稲の字は著眼すべし云
形揃に似たるものゆゑ久志の名あり稲を田舎の絶り

害稲などいふハなかりし攝津風土記曰河邊郡山本
保籤稲村者　大鷦鷯天皇御宇津直沖名田也本名柏葉
田沖名造田串罪以田贖爲故号籤稲村　按今の殘編風土記斷文なし
古事談赤染衛門が歌我思ハ心に絶ぬものの稲串の葉末
の露の落るを見まいは是古代盗ひとの串刺のまゝ風なり
末代にいたりて稲扱といふものの作り出やうなとさし後
するゆゑの如き未だ譏見せざれども串刺とハ田札なりと
といふ說ありていづれも稲盗みしものゝさらされ
ばなりてけるなり、そハ相にもれども凡禾稲を盗
ものは國に律ありて大辟に處せらるゝれたいふべく

稲櫛
磨
礱
和蘭氷沓
連枷
箕
簁
扱把
稲管


颺扇
臼
千斛透
搗杵
撫臼
臥杵
碓

より串刺なと杷やの罷最重(イト)りしたと知るべし

柄竿(カラサホ) 和名鈔

拤(カセキ) 古語拾遺○延喜式織具に加世伎と
いふあり形相似たれハ云るいへり　輪杵(コキキ)　穀搗(モミカチ)

旋轉(グルリ)　振揆(フリバチ)　轉棒(カヘリボウ)　車棒(クルマ)

連枷 枷亦作耞和名鈔引切韻打穀具也○釋名枷所以撾穗出穀也或羅枷三杖而用之○國語耞支耞拂也以擊草○正字通連耞打穀具一云僉又云耨槌穀具連枷編以竹木為之扠折而用所以撽落米粟也方言自關以西謂之棓或謂之拂○廣雅拂謂之架○説文拂架也擊禾連架○農政全書方言宋魏之間謂之攝殊殳自關而西謂之檍齊楚江淮之間謂之扶或謂之悖今呼為連耞

稲耞 西湖志

輪棒 玉堂雑字

蕃名ドルスフレーゲル

此ものは両の竹の頭に孔して横木をさしこみ鋲釘(ビヤウクギ)のぬき軸ぬきつて柄の條(スヘエ)或ハ破(ワレ)竹などを二ツに折曲(ヲリマゲ)柄の頭につけたるなり三才圖會には木條四莖に生革にて編とい

古事記

竪臼(タテウス) 蓋いみしくハ磐と横臼といふ竪臼ハ横臼に對へいへり

舂臼(ツキウス)

幾 書紀 杵あり 即幾袮 打木(ウチキ)

臼 黄帝内傳帝既斬蚩尤因製杵臼

柎子 義楚六帖

杵 同上

后臼 後漢書○今石臼(イシウス)石杵あり以藥を擣く是碓の淅あり読に碌々執泥の事を石臼藝と云つり

蕃名ヘイスル 臼 スタムプル 亦スタムプストック

以上搗臼
臥杵之類　スタムプブロク　撫臼

宇須ハ打窠の義或謂宇ハ搗なり須ハ磨なり一名ニ両
物あり旧今磨搗といふがごとし又上全く下棱て中稍
細く杵ハ直にして両端太きを搗臼搗杵と云　字林直舂曰搗 即杵撫臼
に又全して筒のごとく其槌は上の方短きものを撫
撫杵と云　楊升菴集臥杵 即手杵なり　貞観儀式に臼には某腰杵には
某枚とあり○越風碪歌曰野人傳云人或有務於耕稼者
早且往田執杵以為耒耕田三畝餘手足疲倦将休息換之
乃杵也驚愕怪之再耕之不能復耕也其初為耒操心専一
力行不疑是以杵為耒之用既知非耒則杵亦不能為耒也
何則心為之主也誠於此者刑乎彼也石猶飲羽況於人乎

陶臼　貞観儀式

按是焼物の臼すや延喜神祇式に數所載とある焼物にて
ハ米をつく爲とも見えねど祠具の米ハすべて精にする
ざるがゆゑともいへり又室町日記に朝鮮まで販来を
渡されしと云へども王家に用いねど臼杵なくしてハ如何やへ
とおもふ所に夫是山林に行て木乃枝どもを伐落して
杵にして扱いかふも卑ば地を掘て莚を押込て臼とし
くちをしけれバ言語道断にきこゆることなり易繫辭に
堯舜氏断木為杵掘地為臼蓋其始ハ天然にしてきこゆ

ふみうすなり

柄臼 萬葉集○即碓也
踏臼 畿内以西の方名なり東國の鄙にて地柄臼などいふ
柄臼壺 郷談正音に碓閣、亦碓挨などと云 柄臼杵 即碓嘴なり 保呂々木 或俗
横嘴など云郷談正音に 保呂志 和名鈔引廣韻程ハ碓ノ程也
碓欄亦碓桜とも云 俗言棹なり正字通に碓
衡一名八抵 鳥木 碓の前に扇附所とよる木なり形鳥居に似たり
碓 品字箋碓ハ舂具木杵上之石嘴也○兼名苑碓一名磓又曰碓臼々所以受米碓ハ其舂也此石をとく杵とするあり石嘴と似るハ秋葵の種と水に浸し其汁を用て杵の端を石にて継ふてるなり秋葵の根汁よく石を継べし
蕃名タラプ、ヘイセル

此ものハ礱磨と殊にして米を精鑿に用ふる所なり万葉のかるうす波ハ田廬のもとに吾兄子ハにふぶに笑て立ませる見ゆとある歌此中ハ軽碓なるべしとよまやかるうす波と田廬の下におきて吾が兄子のにこく笑て立ませりといへるとまやかるきうす波ハ踏に苛もく我きれバにふくにもむしもハいふなる歌し○四季物語ハ六月に搖の蟬のなくかげぐるしと枕とこうるさくれどもにハつうへのごおくとなるかうつくしのちまとハやうかもらうわ桓子新論云伏羲制杵臼之利後世加巧借身践碓而利十倍確にて舂バ米砕耗ざる也

横臼(ヨリウス)古事記與久須と讀め是古宇の反久なり

磨臼(スリウス)和名鈔又須留須と讀めり　久留返伎毛乃子枇杷　田臼(タウス)唐臼の字に作

ハ是(ヨ)からべ　穀磨臼(モミスリウス)和爾雅

礱 音龍世本所以破穀出米也○三才圖會自山而東謂之礱編竹作圍内貯泥土状如小磨仍以竹木排為密齒方謂之木礱木礱ト石鑿者謂之石礱○兼名苑礱一名磚

䉛稲 世本　木礱　木磨　穀托

磑 以上類書纂要　土礱 幼學須知　挨栗　礱稲子　檜櫑子　推礱

子 以上郷談正音

蕃名コールンモール

此ものは田家にて穀を磨て米とする具(キヘ)にして木臼竹臼等の製あり田家の要器なるゆゑに田臼とよびて代匠記にくるへきものとよめりといふその事すや賤の字を用のくるめくといふに用ひ物のまはるに俗にくるくるとくるめくなといふ詞もこの理よりいわれうりてまはるといふ意をさとるへし○竹臼ハ米粋多くなくともちも一年にハ壇(ハニ)を易(カヘ)竹を改めざれバ壊(ヤブレ)やすきゆゑに今多く木臼を用ひられど古人の製にかへりまた用ひられ

臼乃眼(メ) 天工開物 臼乃眼ハ磨眼

引木(ヒキ) 亦引手とも云 輟耕録ニ木肘

阿通宇須(アツウス) 和名鈔

引臼(ヒキウス)

石臼(イシウス) 和爾雅○越風礱歌訓曰越俗之所傳石臼屑(ミシ)粟偶而挽之之歌也男女説以忘勞粉末食之

麥臼 麥を引砕て粉にするによりて

磨 説文石磑也蓋古の磑ハ或木をもつて作れり

碾磑 唐律碾磨上轉石也磑磨下定石也

磨子

品字箋 石碾 五雜組

上臼 即碾也○三才圖會填磨曰硐是なり○同上主磨曰臍注磨曰眼

引木 同上轉磨曰斡

下臼 即磑也同上磨床曰摘是なり

宇須承 同上承磨曰槃

保曾 臍

臼乃眼 同上

蕃名ステーンモール 磨

天智紀に高麗の曇徴碾磑を製るとあれども書紀集解引景行紀大碓小碓二皇子之名義曰大碓ハ即碾也小碓ハ即磑也とあるをもて宜なる哉されば必曇徴に始るにはあらじ

此もの石にて作り全く鑿を用ひて手質木石の別と大小の異なるのミ同じ名を立て呼ずる蓋挽臼の制変じて巧便を加へて柄臼を作り又遂に水柄臼の設ありて臼碓にもてはやす事おのづから殊なるあり臼曰碓曰磨曰礱の者方言稍異に古今或ハ混れ易きもあれば凡に煩を懼れていささか圖書せり

美 古事記○即箕也

箕乃舌 本艸箕脣正音に簸槃箕邊といへり

箕 音姬 篇海箕揚米去糠之具方言陳宋楚之間謂之籮○凡箕の古文十餘字字典にのせたり

蕃名ワン

通證引卜氏説曰箕者以去皮殻留子實故訓為實○此をとの和泉上村のものを名あるにて所謂和泉箕なり米を揚糠を去るを簸といふ荘子に播糠眯目と讀りあり今言ひならはしたる朱子談綺に箕にてふるふを播弄といふとあり○曲禮に箕除塵埃之器と注せし八国音塵取といへばかのまて形箕のかく板にて作りたるあり軍陣にても塵取と稱しハ其賤犯る器を載しものにて今の通簸しるふに相似たり

布流比 和名鈔

世伊籠 和名鈔

米透 西州にて多く此器をつかふ東国にて八篩にて用ふ

絹篩 即天工開物同名なり

米篩

籭 音漸或八作簛簁篩和名鈔引説文篩八除麁去細之竹器也

蕃名セーフ

籭は新撰字鏡に豆支布留布と訓り又曰籭八簸也比曽曽留とあり今にも箕にて糠を去るに簸ともいふ人をえらぶのかたちなどの詞あり○籭といふにハ大小あり凡そ眼の粗八透といひ密なるを布留比といふなる東雅に布流とは振也手を動かして用ふるなればいふなり

鉤籭

篩穀箉 三才圖會

蕃名ハングセーフ

麤筥 延喜鎮竈祭式於官齋院舂稲簸以麤筥炊以韓竈

穀車 多識編

通箕

颺扇 三才圖會○集韻颺風飛也揚穀器其制中置箕軸刺穿四扇或六扇又謂之扇車

扇米風車 圖繪宗彝

風扇車 天工開物

風櫃 玉堂雜字

蕃名ワンモール

式の舂稲といへるハ是籾搗して之を簸とは稃を遠し歟

なりし麤筥とハ麤簏のおとく目眼の麁篩なりとして其の箕といふるを見るに今乃籾車乃製のおときこれに做ひて作り出せしなるべし後の千斛簁てふものも本ハ麤筥の変製に出たるなりて通箕をおぎなへる農夫ハ蟠道風なども吹通しを祈ふ磨穀搗穀乃類はみ遅の上におかしく折り懸或ハ量にあどより吹ち落さば稃糠ハ飛散りて米は遅乃上に下留るを俗に登保志といふ扇車をも登保志美といひふるきは志を省て登遠美といふ唐箕などを書は假字なり

登と多と通音

穀篩（セミフルヒ） 多識編

多天流（とほし） 和漢三才圖會○今多く箕及桶を用ゐ風に向ひ之をふるひ粃糠を去ることいへり　登保

志男ひ　篩籭亦名とゆくもち　ぞしられバまるし

颺籃 三才圖會形如箕而小前有木舌後有竹柄禾穏攙粃相雜執此操而向風擲之乃得淨穀不待車扇又勝箕

簸（ヒルミ） 邉箕 全淅兵制

蕃名

千斛簁（センコクトホシ） 和漢三才圖會　萬斛簁（トホシ） 但此もの千斛簁よりも功多し　を加ふなるは走の目あり

蕃名ハルプ

此もの新制なり底なき大箱二を重ね置き上級（ウヘノダン）の箱中に　たより右さま斜に板を嵌（ハメ）て下級（シタ）の箱中に右よりたさ

は銅網（カナアミ）を嵌め網究緻密（コマヤカ）にして上より米糠のいまだ簸ざるものを投（ナゲイル）るに先上級（ウヘ）の板を右にたどりおちて次にたの網（アミ）をたどりおちる時に糠は網より脱漏（スケモ）て米は漏さず流してお下に出るを別器に受盛るなり之を箕籭に比すれば力をいれずして日に舂米の粃糠をさることと多石をさりて穀を篩ふに益あり俗用ゆ或謂是風車なり

成形圖說巻之十三終

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan